西宮歴史調査団通信 2016年 4月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298. FAX 0798-33-1799

西宮歴史調査団 10年によせて

西宮市立郷土資料館長 合田 茂伸

西宮歴史調査団は、10年になる。

最初は、石造物の調査の実際、古文書とは何かという大学の古文書学のような講座、聞き取りという独自の方法をもつ民俗学の実習などを、専門の先生を招いて「学習会」を行うことからはじまった。

３年間続けるうちに、同じメンバーが繰り返し受講してくださるのをみて、「次は自分たちで調べるボランティアをやりましょう」ということで始まった。

私の専門は考古学、発掘調査です。発掘調査は、原始古代の人の歩いた跡、住まった床に、たとえば弥生時代なら２０００年の時を越えて、発掘調査担当者は最初に触ることができる「特権」がある。このことは、何度調査を経験しても、感動する。その喜び驚きをみなさんにも味わってほしい。もちろん、発掘調査に参加してもらうのはなかなかに困難なので、野外にある文化財（石造物、橋など）を手始めにはじめてみましょう、ということになった。いわば、だれでもアクセスできる「まちの文化財」である。そのうち、野外作業が苦手な方もできる古文書も加わって幅が広がった。

例えば、石造物なら、その文字を刻んだ職人のまさにその跡を指でなぞることによって、江戸時代の人が石に文字を刻むということを３００年を隔て追体験できる。文化財を介して江戸時代の人と対話できる。

そうして、自分たちの地域の歴史を自分たちで書こうじゃないか、そして、文化財に関わる人を一人でも二人でも増やしたい、ということから、文化財調査ボランティアをやってみよう、ということになった。

10年間で調査の成果がたくさん集まってきた。これからは、それを活かしたい。調査団主催のウォーキング、今日のような発表会、パネル展、出張講座…。さらに、調査員が調査指導員にステップアップする、これが「サポーターからプレイヤーに」である。

橋梁班の倉田さんがおっしゃった「おもしろそうなので調べてみようかな…」、これがいい！ フィールドワークの楽しさが伝わってきたな、と思う。これぞ、わたしの思うツボ。

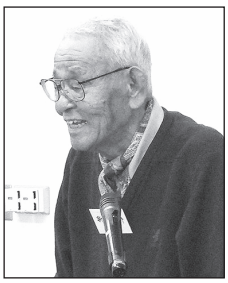
これからは、本（報告書や紀行文など）を出したいし、他市の文化財に関わるボランティアの方々とつながりたい、と思っている。

今日お越しのみなさんが、登録され、フィールドワークに活躍されることを願っている。

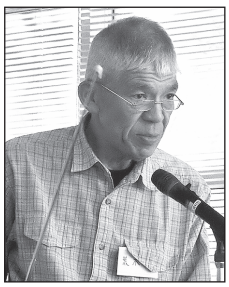
（平成27年度報告会挨拶より）

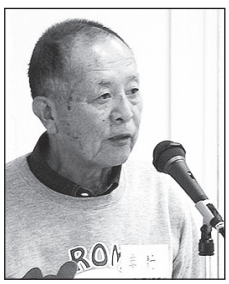
あいさつする合田館長

川上団長の開会の言葉



石造物班 新井さん(上)、荒木さん(中)、粟野さん(下)による報告





細木さんのあいさつ

古文書班 清水さん

橋梁班 小西さん(上)、倉田さん(下)の報告

竜吐水班 iMoveで報告

編集・衣笠周司（竜吐水班）

西宮歴史調査団通信 2016年 5月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298. FAX 0798-33-1799

西宮市立郷土資料館 西尾 嘉美 私のお気に入りは↑これ！

おひなさま

学生の時に日本史・民俗学を学び、縁あって専攻を活かした仕事に就くことができ、今日に至っています。いささか長い年月の中で、多くの資料に関わりましたが、資料そのものだけでなく、その所蔵者との思い出深い出会いもたくさんありました。

今回ご紹介する資料は、明治時代前半に作られた男びな・女びなの親王飾りで、三田市（以前の職場）の市街地中心部にお住まいの方から、母屋・蔵を建て替えるにあたり寄贈していただいたものです。

端正な顔立ちのおひなさまに魅了されたのは言うまでもありませんが、所蔵者から伺ったお話に深い感銘を受けました。

寄贈いただくおひなさまを拝見した後、蔵へと御案内いただきました。

蔵の中に一歩入って驚いたのは、大小様々な木箱が整然と収納されていたのです。それらの木箱は、本膳・椀の一式（40人前）、皿・碗の陶器類、火鉢・花器などの調度類、掛け軸・屏風の収納箱などのほか、布団類の入った長持、古い箪笥もありました。あまりにきれいだったので最近整理をされたのかと思いましたが、祖母・母の時代からのままなのだそうです。

「このおひなさまは、祖母から母、そして私へと受け継がれましたが、おひなさまには申し訳ないことをしてしまいました。それは、第二次世界大戦後まもなく洪水に見舞われて、蔵に納めていたおひなさまを水に浸けてしまったのです。母に教えられたように、蔵の2階に上げておけば良かったと今でも後悔しています。」

おひなさま＝奥の大型の一対（手前の2組は別資料）。男びなの高さは45㎝＝明治時代前半　三田市教育委員会所蔵

道具には「似つかわしい居場所」が

その母の教えとは…

「お道具にはね、納めるべき場所があって、適当な置き方をすると道具が泣きますよ。使おうと思ったときに傷んでしまっていたり、なかなか見つからなかったりするのは、道具が嫌がってしまうからなの。それに、道具には使う目的や使われ方に合わせた似つかわしい居場所があるでしょ。」

そうした母の教えを受けながらも面倒に思い、とりあえず1階に置いたままにしていたら、洪水の水が蔵の中にも入ってしまい、おひなさまの木箱も水に浸かりました。幸い、おひなさま自体は大丈夫でしたが、台座を駄目にしてしまったとのことでした。

この時、「道具」には「納めるべき場所」と「似つかわしい居場所」があるという言葉が私の胸に響きました。

それまでさまざまな民具を取り扱いましたが、「資料」であって「道具」としての意識は希薄でした。そもそも民具は人の暮らしの中にある「道具」です。道具は、使われるときには、その使い方に応じた場所に置き、収納するときは次に使うことも考えて収納する…これが道具としての有りようなのです。

所蔵者（使用者）の手を離れると、民具は資料になってしまう。資料として保存するだけでなく、民具の本来の姿を所蔵者になりかわって記録し伝えることも、私たちの仕事なのだということを肝に銘じた出会いでした。

編集・衣笠周司（竜吐水班）

西宮歴史調査団通信 2016年 6月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298. FAX 0798-33-1799

私のお気に入りは これ！ 古文書班

（順不同）

ハンコの形　川上　早苗

各人が押している印は、丸・四角・楕円・扇形などの形や大きさ、楷書・篆書・記号？などの文字や模様の違いなどただ見ているだけでもいろいろあっておもしろいです。どんな文字が使われているのか調べてみようと思ったのですが篆書体はなかなかむつかしく、まずはわかりやすい辞書を探さないといけないです。

気になること　倉田　克彦

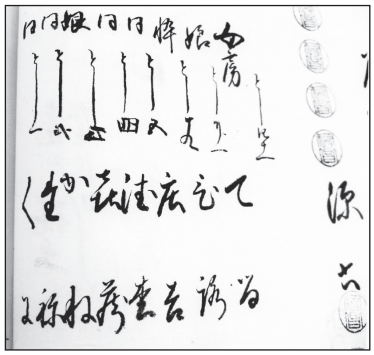
嘗て女性の名前は仮名２文字で書くのが原則だったと読んだ。西宮宗旨人別帳でも「おみつさん」は「美津、美川、見川、見津、未川」を字源とする仮名（変体仮名）２文字である。

しかし、「おやえさん」は「八重」と漢字２文字（訓読み）である。何故仮名でないのだろうか。

大家族　清水　洋子

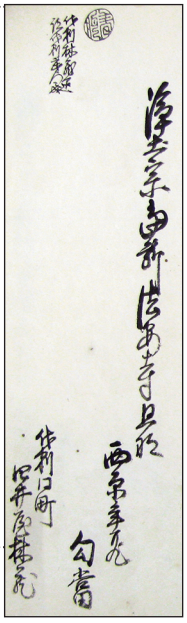
濱東町は一世帯が小さく、半分くらいが１～３人世帯ではないでしょうか。

そんな中、写真は５人の年子がいる９人家族。一頁内に収めようとキチキチに詰めて書かれた名前が、賑やかな家を想像させます。



私の気になる人物　髙谷　康彦

まず西原というのが、苗字のようで屋号らしくない＝写真右。勾當も名前らしくなく、男性？　女性で変体カナならなんて読む。代判人がいるが、女性なら納得できるが、男性なら何故（但し後に代判取りやめ）。盲人の官位に勾當というのがあり○○検校、△△勾當の名で箏・三味線の盲目の音楽家がいるが、その関連なら男二十九歳で代判人がいたこともありうるかも。いずれにしろ気になる人物です。



「屋号」というもの　須藤　久美

それはどの人にも屋号というものがあることです。名前の前に必ず屋号があり、○○屋の○○という名前です。この屋号は現代では会社やお商売関係にしかありません。この屋号を読むとその人の職業を想像できるのです。煙草屋・○○屋・☆☆屋など空想が膨らみます。

古文書も地名も文化財！　井上　太刀夫

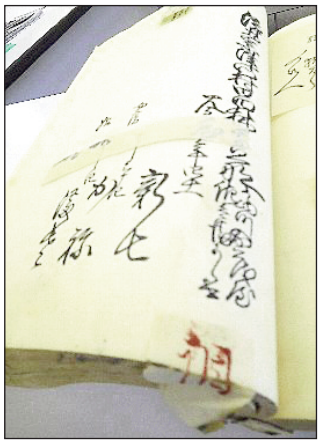
私の楽しみは、全国各地の博物館巡りである。

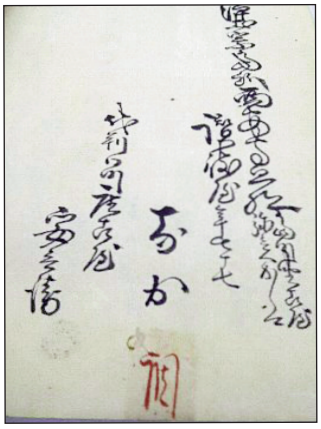
そこには必ず「古文書」が展示してあり、いつも読めたら楽しいだろうなあと思っていた。広辞苑によると「古文書とは、過去の時代の史料となる古い文書。差出人・受取人・要件・日付などを備えた公文書・私文書をいい、古記録と共に、史料として最も重要」とある。また、ある本に「全国的にみれば、一見古い紙くずにしか見えない古文書の類は、次々に破棄され続けているといってもいいだろう」と書いてあった。「地名は無形文化財である」という表現があるが、残念ながら地名も、合併のたびに消えていっている。現在読んでいる「西宮町宗門帳」にある地名は、ほぼ残っているのは嬉しいことである。

「調」の貼紙　福富　正俊

私は現在嘉永３年（１８５０）の宗旨人別帳を調査していますが、その中に「調」と朱書きした貼紙が２箇所出てきました。

これは不明な点があり調査する必要があるため、付箋を貼ったのでしょうか。丁度２年後の人別帳があったので、見てみますとこの家族は両方とも削除されていました。やっぱり怪しかったのですね。





編集・衣笠周司（竜吐水班）

西宮歴史調査団通信 2016年7月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298. FAX 0798-33-1799

私のお気に入りは これ！

鳴尾新川の歴史的橋梁群

橋梁班 清水 貞夫

鳴尾新川をご存知ですか？

鳴尾地区を武庫川と並行して流れている水路です。この水路もむかしは、鳴尾の田圃にとっては欠かせない農業用水でした。昭和の初期に土地改良計画で、かつての鳴尾川が整備され、いまでは住宅地の中を流れています。

明治の終わりごろ、武庫川と鳴尾川の間に、鳴尾辰馬家の別邸が遊園地となり、百花園と呼ばれていた時期があります。

80歳過ぎて いまも現役

この新川には一〇〇〇メートルほどの間に、一〇の橋があり、遊園地に縁のある遊覧橋、月見橋などの橋の名前が残っています。昭和八年に架設されたこれらの橋は、コンクリート製ですべて同じデザインが施され、高欄に二種類の模様の鉄格子が

填められています。八〇年以上経ったいまも現役であり、歴史的橋梁群だと思います。

川筋は、桜並木が続いており、数種の桜が満開の時は見事です。西宮の名所夙川の桜には及びませんが、この川筋は兵庫県のさくら回廊の南端にあたります。

さくら祭りや 精霊流しも

春には桜祭り、夏は精霊流しのイベントも開かれます。幅一〇メートルほどの水路で、普段の流れはわずかですが、雨が降り水量が増すと、大型の鯉が群れをなして遡上しており、その光景は圧巻です。

機会があれば、訪れてみてください。

↑写真は国道43号線より下流を眺む

編集・衣笠周司（竜吐水班）

西宮歴史調査団通信 2016年 8月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298. FAX 0798-33-1799

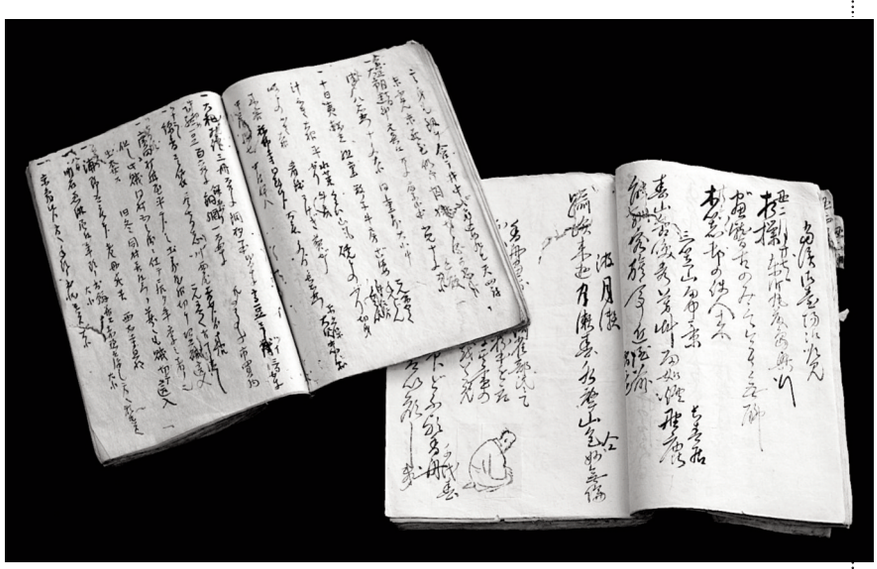
西宮市立郷土資料館では平成二十八年七月十六日（土）から八月二十八日（日）まで、第三十二回特別展示「西宮町人の生活と文化―江戸時代の日記を読み解く―」を開催しています。本展示では、江戸時代の西宮町人が書いた日記を中心に、当時の生活について紹介しています。その中から注目していただきたい資料を紹介します。

（衛藤　彩子）

第32回特別展示 西宮町人の生活と文化 －江戸時代の日記を読み解く－

（一）西宮町人が書いた日記

質屋などを営んでいた富裕な商人真多（また）長左衛門家の日記二点です。実物が現存する西宮町人の日記はこれだけです。三代目当主が書いた文化二年（一八〇五）七月から一年間の日記と、四代目当主が書いた慶応元年（一八六五）一月から一年間の日記です。慶応元年の日記には、建造中の西宮砲台が登場します。



（二）西宮神社御社用日記

西宮神社の神主が書き継いだ日記で、今年二月に市指定文化財となりました。江戸時代は、廣田社・西宮社・南宮社は一体とされたため、廣田神社の記録でもあります。本展示では、真多長左衛門の日記にも書かれている神事・祭礼を中心に紹介しています。

（三）西宮町人の文化活動

二名をピックアップして関連資料を紹介しています。一つは、医者・俳人勝部青魚（かつべせいぎょ）の還暦祝い俳句集『桑蓬集』です。友人の上田秋成も俳句を寄せています。もう一つは、酒造家千足真言（ちあしまこと）の文章が載った『扶桑拾遺残葉集』です。江戸在住時に賀茂真淵の門人となり、師匠や門人に邸宅で自家製の酒を振る舞ったエピソードがある人です。

小さな日記に多彩な内容

展示している日記は、どれもB5サイズほどの小さなものです。しかし、その中には多彩で豊富な内容が詰め込まれており、まさに西宮の歴史の宝庫です。文字は読めなくとも、実物資料から当時の西宮町人の息吹を感じて下さい。

編集・衣笠周司（竜吐水班）

西宮歴史調査団通信 2016年 9月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298. FAX 0798-33-1799

阪神南リレーミュージアム「阪神ゆかりの作家をたずねて」

九月三日（土）から十月二日（日）まで、西宮市立郷土資料館において第四十六回特集展示「西宮神社の石造物～春詠む芭蕉、秋の鬼貫～」が開催されています。（古文書班・清水 洋子）

西宮神社の石造物　第46回特集展示
～春詠む芭蕉、秋の鬼貫～

西宮歴史調査団の石造物班の四年に及ぶ調査をベースに企画・構成されており、取り上げた石造物は大きく二つのテーマに分けられます。一つ目は西宮神社ゆかりの文化人、二つ目は西宮神社に寄進をした人々です。それぞれのテーマの中から注目していただきたいものをご紹介いたします。

一つ目の見どころは、やはり本展示のメインである松尾芭蕉・上島鬼貫の句碑です。この句碑は芭蕉百五十回忌として建てられ、裏面に十七名の句が刻まれています。実はこのうち西宮の俳人はたった一人で、発起人を含め十一人が伊丹の俳人が占めています。当初、西宮神社の境内にあるならば西宮の俳人も複数名いるだろうと考えていた私達は、この事実に衝撃を受けました。伊丹の俳人たちは、芭蕉百五十回忌という大きな節目の句碑をなぜ伊丹ではなく西宮神社に建てたのか？

そのヒントは石造物班で過去に報告された「当時の西宮神社の賑わい」にあると思われます。芭蕉塚や鬼貫・梶曲阜などの句碑が建つ西宮神社の存在の大きさを更に感じられると思います。

寄進者の名や屋号に注目

二つ目でご覧頂きたいのは、西宮らしい屋号や名前の人々が刻まれている石造物です。上総国の住人が奉納した石灯籠と八馬家の玉垣、酒家杜氏中の石灯籠をパネルで紹介しています。これらから多様な業種や役割の人々と西宮神社の関わりを見ていただけると嬉しいです。また、パネルで紹介できなかった石造物の一部をパンフレットにしました。コンパクトに纏まった解説は、古文書班・川上さんの力作です。

展示解説をご覧になると、この句碑が建つ西宮神社の存在の大きさを更に感じられると思います。

今回の展示では、調査のほかに、俳谷さんをはじめ学芸員の皆さんの指導のもと、句碑の採拓・展示パネルの作成など通常の班活動ではしない作業を経験することができました。展示内容と一緒にそのあたりもご覧いただけると幸いです。

× × ×

なおこの展示は、阪神南地域の個性豊かな文化を発信するため、博物館や美術館の７館が連携して行う「阪神南リレーミュージアム・阪神ゆかりの作家をたずねて」の一環として開かれています。

編集・衣笠周司（竜吐水班）

西宮歴史調査団通信 2016年10月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298. FAX 0798-33-1799

竜吐水をご存知ですか

竜吐水班　中田　昇

竜吐水・竜吐水班をご存知ですか。竜吐水は、消火用具の一つです。水を入れた大きな箱の上に押し上げポンプを備えたもので、横木を上下させて水を噴き出させます。江戸時代の中ごろ、オランダからもたらされました。竜吐水という名は、竜が水を吐く姿に見立てたことによります。

日本における消防活動の歴史は、江戸時代初期までは消防組織も存在せず、火事になれば自然鎮火を待つだけでした。明暦三年（一六五七）の大火（振袖火事）以降に防火対策がとられ、防火帯・避難所となる場所が設置され、大名火消しが誕生します。

正徳五年（一七一五）に町火消しが誕生し、明和元年（一七六四）に竜吐水が配備されました。その後、明治時代末ごろまで使用されたようです。

竜吐水班は、この竜吐水の残存状況など現状を把握し、現地で現物の実測、聞き取りなどで記録を作成しています。

→神戸女学院に保存されている竜吐水

現物を探して実測や聞き取り

→竜吐水を操作してみる班員たち

また、消防署・消防分団の見学により保存されている消防装束・鳶口、団旗等の用具・火の見櫓等の確認も行っています。

私は、今年の四月より参加させていただき、六月に甲東地区下大市分団の見学・神戸女学院所蔵の竜吐水の調査及び女学院文化財の見学、七月に資料館所蔵の竜吐水の調査に参加しました。

今後も消防団等にアンケートや訪問調査を実施し、残存状況の把握及び調査活動を行ないます

また、機会があれば郷土資料館が所蔵する竜吐水による消火活動の再現が出来ればとも思っております。

竜吐水＝資料館に保存されているうちの１基

編集・衣笠周司（竜吐水班）

西宮歴史調査団通信 2016年11月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298. FAX 0798-33-1799

激動の時代を語る社寺建築の文化財

社寺は、激しく変化する社会にあって景観が変わらない代表のように思われます。しかし実はその姿も少しずつ変化しています。近くは明治時代、神社もお寺も激動の時代でした。それは建築であっても同じで、江戸時代以前のものはなかなか残っていません。その点では、市内の社寺に残された建築の中で、特に指定重要文化財になっているものは、やはり歴史を物語る特に重要な資料です。

西宮市の社寺に残る建築では、国指定で二件、兵庫県指定で一件、西宮市指定で三件がそれぞれ重要文化財となっています。

今回の展示では、これら建築に目を向けていただき、そこからどのような情報を汲み取ることができるのか、あまりむずかしい建築史用語は避けながら、解説したいと思います。

海清寺の三門（市指定文化財）

建築史の位置づけとは別に、それぞれの建築は地域史との関連が深いものがあります。

神呪寺の仁王門では、門の建築学的な研究が示す建築年代と、文書記録や名所ガイドの記事が相互に齟齬をきたさない、記録としての確実性が興味深いと思います。

公智神社の神輿殿が建てられた頃には？

公智神社では、神輿殿の建築様式から室町時代末期の建築ということは明らかですが、それだけでは、その時にそこに建てられたとは限りません。どこかにあったものを解体し移築したかもしれません。ところが今の場所を造成した時期、または本殿を建てた時期と時を隔てずに地鎮を行なった際の資料が確認されました。幸いにその資料が埋納された年代をかなりの確実性を持って推測できる資料です。山だった場所が開かれて本殿が建てられた時代と、神輿殿の建築された年代が近い。そうなると、この土地が開かれ、本殿が祀られ、神輿殿が建てられたと、順を追ってたどることができ、一連の作事はおよそ二〇年間のことと考えるのが妥当なようです。式内社が場所を移して神社の様子が変わる、山口町では室町時代の終わり頃に何があったのでしょうか。興味は尽きません。

（西川　卓志）

平成28年度西宮市
指定文化財公開

西宮の社寺建築

平成28年11月1日（火）
から11月27日（日）

編集・衣笠周司（竜吐水班）

西宮歴史調査団通信 2016年12月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298. FAX 0798-33-1799

私のお気に入りは これ！

早栗 佐知子

仕事関係の色々を書きとめる用に、もう十年近く同じシリーズのノートを使っていますが、平成二十二年十一月五日の日付のページは、特別に賑やかです。それは、たくさんのスケッチや数字や説明文が色分けして書かれているせいと、変にハイな気分で書いているせいです。おいおい、ノートとお気に入りの関係は？と言われそうですのでここらで説明します。お気に入りは、平成二十三年二月～三月に開催した特別展示「西宮の山岳信仰」で展示した「六甲山大権現の石碑（もと石碑）」です（写真左上）。

そしてノートの内容は、「六甲山大権現の石碑」を六甲最高峰近くの社務所までお借りしに行く大運搬計画の計画表なのです。翌年二月からの展示なのに、なぜ十一月に運搬するのか？　それは山道が凍結するからです。石碑は太い角材と強化ガラスで手作りした頑丈な額に入っていることも手伝って、男性二人でやっと持ち上がる重さでした。（写真下）

昭和十年頃の六甲山大権現の石碑

六甲山大権現の石碑

それをどうやって運ぶか？　館内で相談した結果、特製担架を作ることになりました。かと言って、大きな担架では車には載せられない。そこで、先のノートです。

石碑は、縦九十一cm、横七十一cm、厚み五cm。車の荷台は縦一〇四cm、横一〇〇cm。

104−91＝13÷2＝6.5

持ち手の長さが六・五cmしかない担架！　でも、六・五cmの持ち手が有ると無いとで大違い！ということで、優しく器用な文化財課職員の方に石碑用特製担架を作ってもらいました（写真右）。

借用日には、館の職員の皆さんに手伝ってもらい、石碑はじめ多くの資料を梱包し山上から館の収蔵庫へ運び込むことができました。それから、展示終了の翌年三月末までの間、石碑は郷土資料館で「大権現」と愛情込めて呼ばれました。

展示された六甲山大権現の石碑

特製担架に載る石碑

編集・衣笠周司（竜吐水班）

西宮歴史調査団通信 2017年 1月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298. FAX 0798-33-1799

私のお気に入りはこれ！

江戸時代の手紙

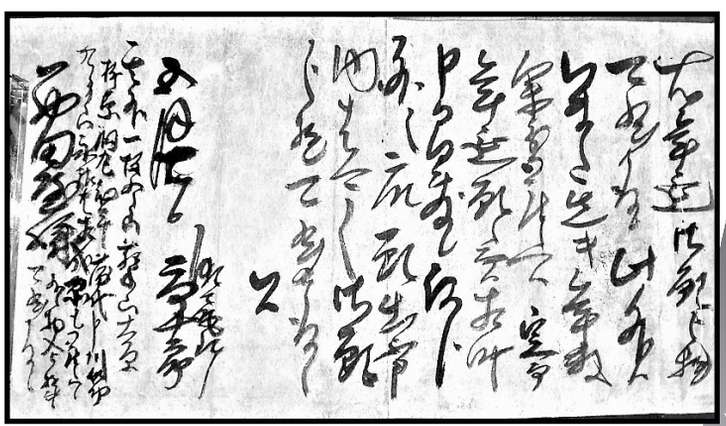
笠井 今日子

江戸時代の古文書には人気があるモノとないモノがあります。

一番人気は「簿冊」でしょう。記録として残すために作られたものが多く、使える史料だからです。次に人気があるのは、「竪紙」や「竪継紙」という形態の文書かと思います。願書・届出・証文等に使われることが多かったため、重要な書類として残された可能性が高く、地域・社会の問題や仕組み等を読み取ることができる史料だからです。

そして、恐らく最も人気がないものが「切紙」や「切継紙」で、特に手紙は敬遠されがちです。なぜなら、手紙は事情に通じている個人同士のやり取りであるため、内容や年代等が省略されるなど、それ一点だけでは意味が分からない場合が多いからです。そして、字の崩しが強いという意味でも、大変読みにくい史料なのです。

しかし手紙は、書かれる背景が分かっている場合、非常に魅力的な史料になります。外向きの書類では削除される、書き手の感情がとてもよく表れるからです。



江戸時代に製鉄業を営んでいた中村家（島根県江津市）に残された古文書

写真は、江戸時代の製鉄工場の実務者から経営者に宛てられた手紙の一部です。製鉄に使う燃料（木炭）を生産する山を確保して欲しいと依頼しているのですが、「何分外之衆願出不申内はやく御願」するよう念を押しており、切実な思いが読み取れます。

この依頼を受けて、経営者は山林利用に関する願書を作成するのですが、それは非常に事務的な文章でした。この手紙があることで、出願内容の重大性や時期の重要性が付加されるのです。

古文書に記された出来事は、現代から見ると既に結果が出ている「歴史」ですが、手紙を読むことで同時代の感覚に寄り添うことができる気がします。そんな江戸時代の手紙が、私のお気に入りです。

※なお、本文中における古文書の人気順は、笠井の独断と偏見によるものです。

2017年 おめでとうございます

シベリアから松江の宍道湖にきた白鳥です。
酉年と歴史調査団の皆さんの飛躍を祈念して
羽ばたきます。　Photo:Kinugasa

編集・衣笠周司（竜吐水班）

西宮歴史調査団通信 2017年 2月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298. FAX 0798-33-1799

私のお気に入りはこれ！

蜆(しじみ)をめぐる冒険

石造物班　野中知徳

昨年の春に歴史調査団に入団。最初の調査地が日野神社。木漏れ日の参道に崩れそうな古びた石垣がいい感じでつづいています。かつては別称霧島の宮と呼ばれ霧島、つつじの名所だったようです。現在、植樹祭などを通じて復元中、成長が楽しみです。参道の途中に瓦林城跡と刻んだ石柱を発見。わくわくが一杯の日野神社です。

さて、問題の蜆です。日野神社の御由緒に旧地名が上瓦林、蜆ノ尻（バイノシリ）と。いままで開いた記憶のない辞典の漢語林は入団後出番が多い。でも蜆の語意は他にミノムシぐらい。愛読書の「地名の話」にも言及なし。調査員初年兵の前に突然の難題が現れました。

まずは、妄想的仮説を…海岸線が日野神社（阪急神戸線）あたりにあったのは、およそ五千年前。瓦林城の堀をつくる過程で武庫川の土砂によって埋まっていた貝塚が出現。当時の百姓は蜆だらけの貝塚を見て、当地を「蜆のはた（蜆ノ尻）」と呼んだ。

では、気を落ち着けて、最初の検索へ。まずは、武庫川と蜆。武庫川もずっと上流の藍本（三田市）には、お鶴という親思いの娘が、体の弱い父親のために川へ蜆取りに出かけたところ、渕から足を滑らせて死んでしまった。引き上げられたお鶴の胸にはしっかりと蜆の入ったカゴが抱きかかえられていたというお話しが…じーんとくる悲しいお話です。でも、本題からは大はずれですね。

つづいて、貝塚の検索。近隣の尼崎市の金楽寺貝塚は、アオガイを中心にヤマトシジミなどの貝類の厚い層が出土するも、蜆は小さいので目立たず。いささか遠隔地ながら浜松市の蜆塚遺跡は、一・五ｍほどにも達する蜆の堆積層があり、正真正銘の蜆ノ尻ですね。

西宮市に目を向けると、上田西町（東鳴尾小学校の西南）の小さな川を蜆川と呼んだとのこと。また、甲子園口遺跡には弥生中期から古墳時代後期の漁具が出土。さらに、「鳴尾村誌」によると明和病院（上鳴尾町）南の道路の地下深くで貝塚を発掘。平安後期か鎌倉時代に漁撈を営んだ人々の生活の跡とのこと。海岸線が南進するにつれ、武庫川西側における漁民の生活の場が蜆ノ尻→甲子園口→上鳴尾町に移動したと言えるかもしれません。

ここで再び、妄想的仮説が…武庫川の東にある東武庫遺跡は、弥生時代前期の集団墓地で、墓地を営んだ集落は未発見。この遺跡は、日野神社から直線距離で一・三㎞の距離。蜆ノ尻の地名を手がかりに集落の痕跡を探していけば、「西武庫遺跡」が日野神社の近くで発掘される日がくるかも…ここほれワンワンではないですが、蜆塚が出てこなければ空理空論ですね。というところで、蜆をめぐる冒険は迷宮入りになりました。

現在廣田神社の調査で、次のわくわくの冒険を探しています。

編集・衣笠周司（竜吐水班）

西宮歴史調査団通信 2017年 3月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298. FAX 0798-33-1799

次を目指して

歴史調査団も「高校3年生」？

１年は３６５日。誰にとっても、同じだけの時間のはずですが、皆さんは「もう、一年」と思われますか？「まだ、一年」と思われますか？　それとも、「たった、一年」でしょうか？

こんなことを書いていると、まるで年頭のご挨拶ですが、役所で仕事をしていると「年度」単位の仕事なので、３月は年末、４月は年始になります。

では、「年度」という単位が取り入れられたのは、何時でしょうか？今から遡ること１３０年ほど前、明治１９年（１８８６）に国の会計制度として定められました。学校制度として定着するのは明治２５年に小学校の入学が４月に統一されて以降ですが、ちょうど桜が咲き誇り、旅立ち・門出にふさわしい時期として、受け入れられていったようです。

西宮歴史調査団も、結成から１２回目の年度をむかえます。学校教育にたとえれば、小学校入学から、高校３年生に進級です。子供たちが毎年新しいことを学び吸収していくように、調査団のみなさんがドンドン前へ歩まれるのに合わせて、学芸員も歩んでいかねばなりません。

さて、平成２９年度の年度末には、どこまで進んでいるでしょうか？

そして、どんな「○○○、一年」になるのか、楽しみです！　（西尾）

速報 「西宮神社御社用日記」が県重要有形文化財に

このたび「西宮神社御社用日記」が、兵庫県の重要有形文化財（古文書）に指定されることが決まりました。

「西宮神社御社用日記」は江戸時代から現在まで書き続けられている社務日誌で、元禄七年（一六九四）から明治八年（一八七五）までの二一六点が指定の対象になっています。指定にあたり、江戸時代における神社の運営実態、西宮町を中心とする地域の情勢、全国的なえびす信仰の広まりなどを知ることができる貴重な史料であることが評価されました。

昨年の第三二回特別展示「西宮町人の生活と文化」で一六点を展示しましたので、じっくりと御覧いただいたことと思います。

ほぼ二〇〇年分の記録のうち、まだ三〇年分ほどしか活字化されていません。さらに翻刻・研究を進め、調査団の調査活動ともリンクさせていくと、新しい知見が見つかるかも知れません。

指定された「西宮神社御社用日記」には、調査団にとっても、まだまだ調べることがいっぱいあるという、ホットなニュースをお知らせしました。（写真は西宮神社御社用日記）

編集・衣笠周司（竜吐水班）